



日本の名随筆

93





日本の名隨筆 93 駅

一九九〇年七月二〇日第一刷印刷
一九九〇年七月二五日第一刷発行

編者 宮脇俊三

発行者 和田肇

発行所 株式会社 作品社

東京都千代田区飯田橋二ノ七ノ四
〒101 電話(03)二六二・九七五三
FAX (03)二六二・九七五七
振替口座 (東京)六二七一八三

本文印刷 図書印刷

平版印刷 栗田印刷

製本所 小泉製本

(落・乱丁本はお取替え致します)

© Syunzō Miyawaki 1990

ISBN4-87893-993-1 C0395

駅

ぼうん。ぼうん。ぼうん。

数へる時は、十二。

うすぐらい待合室の電灯は、蜘蛛の張る巣にかすんでゆき、
人の頭に重たさがのしかかり、意識はうすれ、

おちいさんは、洋傘の柄に顎をのせ、

奉公先からかへる娘は、信玄袋にもたれ、
涎をながして、無心に眠りこける。

下り東海道線、最終の列車はまだ来ない。

待ち人か。急ぎか。心落ちつかず、

狭い腰掛のあひだを、ゆきつもどりつ、

折々気にしては、外をみる洋服男。

そとはくらい、低い家並み——雨は、本降りになつてきたらしい。
桐油をかけた荷車かしゃ一輛、雨にぬれて、
ひとりでにことりことりと迂り出し、
前の車とぶつかり、後戻りして、ぎいと止まる。
篠つく雨の束を浮かせて、カンテラをふりふり、
レールに添うてあるいてくる人の姿。

（金子光晴『大腐爛頌』）

馱
—
目次

駅※金子光晴

駅二、三

省線電車

道草

鉄道ウーマン

踏切

危ない酒／駅長驚く勿^{なか}れ

鉄道館漫記

「ガード下」の町、有楽町

市ヶ谷駅の近くで

駅

上野駅

上野ステーション

京都、東京から百五番目の駅
——東海道本線各駅停車の旅

……小沼 9

……上林 12

……吉田健一 16

……重兼芳子 21

……日野啓三 24

……阿木翁助 28

……内田百閒 34

……川本三郎 39

……常盤新平 44

……後藤明生 48

……木山捷平 55

……安藤鶴夫 61

……立松和平 65

東海道本線大船駅 昭和二年夏

……原田勝正 75

篠突く雨の糸魚川

……高橋義孝 85

小浜線若狹本郷駅 故郷の駅

……水上勉 101

駅長／駅そば

……小林勇 105

幻の草軽電車

……北條秀司 110

東赤谷駅

……宮脇俊三 118

消えた横浜港駅

……西野保行 125

一〇〇年の歴史を秘める門司港駅

……松尾定行 131

三菱石炭鉱業南大夕張駅

……種村直樹 136

杭州の一夜（上）

……芥川龍之介 145

駅で

……伊藤整 148

無蓋車の旅

……加藤登紀子 166

モスクワ
莫斯科行列車は

やおら黙念と北京駅を離れた

……桐島洋子 174

国際急行列車

シンガポール・パンコック

……室 謙二 183

ハウラー 駅界限

……佐江 衆一 199

ワイン地帯各駅停車

……鈴木 準二 203

メトロ

……玉村 豊男 211

アガワ峡谷紅葉列車 抄

……阿川 弘之 227

駅

……串田 孫一 240

あとがき

執筆者紹介・駅随筆ブックガイド

〈口絵〉 森 惣介 「鹿児島本線 門司港」

『心のふるさと―駅のスケッチ』 (彰国社) より

〈函絵〉 『旅行用心集』 より

装丁 菊地信義

駅

駅二、三

小沼 丹

駅と云ふのは列車が停つて、客が乗り降りするためのものだから、別に変つてゐる必要は無い。どこでも同じで差支へない。さうは思つてゐても、その駅特有の表情があれば、その方がいいと思ふ。いつだつたか東北の方に行つたとき、列車が貝田と云ふ駅を通過したら、プラットフォオムにいろんな植物が植ゑてあつて、傍に名前を書いた札が立ててあつた。何だか降りて見たいやうな気がした。

昔、まだ学生のころ、夜汽車に乗つてゐたら、真夜中に小さな駅に停つた。眠れないでゐたら、窓から顔を出してみると空に朧月がかかつてゐて、プラットフォオムに白い花が咲いてゐた。

汽車が動き出したら、プラットフォオムに駅長が直立不動の姿勢で立つてゐて、その足元に小さな犬が坐つてゐるのに気が附いた。何だか犬も、気を附け、のつもりでゐたやうに思はれる。一篇の美しい童話を読んだやうな気がしたことを憶えてゐるが、あれは、どこの駅だつたかしらん？

浅間山麓の追分に、年に二、三回出掛けるが、追分駅で降りたことは無かつた。手前の中軽井沢

で下車して、バスに乗るか、タクシーに乗るかする。しかし、去年の十一月出掛けたとき始めて追分で下車した。追分で下車するつもりだった訳では無い。どう云ふ理由からだったか、うつかりして乗り過したのである。しかし乗り過して、却つて良かったと思ふ。中軽井沢は駅の前が商店街で、何の変哲も無い。しかし、追分駅はプラットフォオムに降りると、眼の前に秋の色に濃く染められた林があつて、澄んだ空氣がきらきら光つて、好い気分になる。小さな素朴な駅で、陸橋なんか無いから乗つて来た汽車が出てしまふ迄秋風に吹かれてゐる。尤も小さな駅だから、ちよつと待つてゐればいいのである。全身に秋を感じながら、青空の下の閑散としたプラットフォオムに立つて汽車の出て行くのを見送るのは悪くない。

汽車が行つてしまふと、駅員がプラットフォオムの或る箇所を動かして階段が現れる仕掛けになつてゐる。お待たせしました、いや、どうも、と階段を四、五段降りて線路を渡つて改札口に行く。何だか久し振りに汽車の駅らしい駅に降りた気がした。

追分に何日かゐて、氣に入つたから帰りも追分駅から汽車に乗ることにした。追分で一緒になつた友人が、八高線經由で帰ると云ふので、何だか珍しいから早速同意した。これは切符で苦勞することは全く無い。八高線經由東京行と云ふ一番簡単素朴な切符を買へば良いのである。待つてゐたら、高崎行の鈍行列車がやつて来た。その二輛目だかに乗つたらがらで客が一人もゐないのに驚いた。いつも空いてゐるがこんなことは始めてだ、と友人も驚いてゐた。減多に見掛けない古ぼけた車輛で、座席は固く窓も狭い。如何にも追分駅で乗る列車に相応しい。しかし、坐つてみる

と古典的と云ふか、何となく奥床しい感じがするから妙である。

かう云ふ列車に乗つてぼんやりしてゐる法は無いから、持参のウキスキイを出して友人と乾盃した。乾盃してゐると窓外の秋色は一段と鮮かで、これが本当の旅だと云ふ気がして来たから不思議である。

省線電車

上林 曉

省線電車を常用してゐるものは何十万とあるであらう。だが、愛用してゐるものはどれだけあるであらうか。尤も、或るサロンからの楽しい延長であつたり、美しい人たちと同車することが出来たりする場合には、愛用されたことになるのである。

けれども、自動車をドライブすると同じ気持ちで、省線山手線をドライブすることは一層快適なことにちがひない。うちに居て退屈して仕方のないとき、心の鬱して仕方のないとき或は心が逞しくてちつとしてゐられないときなど、必ず一度は試むべきものではないだらうか。われわれの心は必ず晴れ晴れとするにちがひない。一まはりには一時間と何分かを要する乗車賃はいくらだらうか。恐らく二十五銭ではないかと僕は思ふ。そしてその切符は、例へば「新宿駅より新宿駅」でなければならぬ。さういふ山手線一週切符が発売されねばならぬ。

たまには、酔つ払つた男がぐつすり眠り込んで、目がさめてみると一まはりしてもとの駅へ戻つて来てゐたといふ話や、網棚の上に荷物を置き忘れたので、その電車が一まはりして来るのを待ち

受け、さつき自分が乗つてゐた車の中へはひつて行つて荷物を取つて来たといふ話などを聞く。これらは確に回帰的な山手線の興味である。

中央線の直線コースを、次第次第に東京を離れて行く気持には、遠心的な淋しさがある。それよりも、吉祥寺あたりから真つ直に都心に向つて肉迫して来る気持には、たてがみを靡かすやうな颯爽感がある。山手線を東京を囲む圈とするならば、中央線で新宿駅を通り過ることは圈を突破して、東京の中へ深く突入する感じを与へる。

新宿代々木間、東京神田間では、二つの線が平行して走る。二つの電車がちつと平衡状態を保つて、ちつとも進行してゐるやうに思はれない。その代り車輪のひびきは二倍にされて耳が聾になるほどである。こんな時、二つの電車に乗つてゐる人々は、知らず識らずの間に、一つの競技を争つてゐるやうな錯誤に陥り、それぞれの電車に心の中でヘビイをかけてゐるのである。しかし間もなく二つの電車は双曲線のやうに離れ異常な速力をもつて遠ざかるのである。

僕は省線電車の中では、本を読むよりも小説のことなど考へることが好きである。それから、車内で二分か三分か目をつぶつてゐれば、睡眠不足がすつかり拭はれるのも好きである。殊に、冬スチームのはひつたクッションの温みと、速力を伴つた動揺とに身を任せるのは、如何なる場所にあるよりもコムホダブルである。省線電車の動揺の外的消化機能については言ふ必要がないであらう。

ラッシュ・アワーといふ時間がある。サラリーマンが仕事場に向つて出掛け、又引き上げて来る

時間であることは言ふまでもない。だが、それは、電車自身にとつては一方的な混雑の時間にすぎない。朝の東京行が汗ばんだ乗客を満載して走るとき、その反対の方向に向つて走る電車は何と閑散としてゐるではないか。夕方東京駅や有楽町を出る電車が、デパートの売りや勤人たちで身動きもならぬほど膨満してゐる時、その反対の方角から走つて来た電車は、明るい灯をともし、瀟洒な散歩服の人たちをおろして行くではないか。

省線電車と駅とを根城とした組織的な犯罪の話はまだ聞いたことがない。電車も駅もあまりにさつぱりしてゐて、犯罪の起りようがないのであらう。正宗白鳥氏は「東京駅」といふ小説で、深夜の大停車場のがらんとした無気味さを書いたことがあつたが、僕が犯罪小説の場面を空想するならば、四谷駅がいいやうな気がする。あの細長プラットフォーム、曲りくねつたいくつかの出入口、青く茂つた夏草、市電との関係、駅前の新開地のやうに余裕があり勾配をもつた広場、僕には何だか犯罪小説の構図を考へることが出来るやうな気がする。そのみならず、僕はこの駅を愛してゐるのである。外濠の低地に新設駅のやうにゆとりのあるのが好きだ。

これと並んで、有楽町駅の高架線の駅らしく高雅な姿も好きだ。電車を待つ間、あすこのベンチに腰を下ろして夕焼の空を眺めてゐる人を必ず見かけるのであるが、さういふ人たちを見かけるたびに、僕は彼等とともに、都市居住者の大らかな哀愁を感じることが出来る。又、銀座の方から歩いて来れば、いろいろの電車や汽車が窓々に花やかな灯をもつて、夕焼空の手前を、あちこち走るのが見える。そして高いプラットフォームに立つてゐる人々の姿が、どれもこれもすつきりと脊高